

“傷寒論鍼灸配穴選注” より学ぶ “陰陽太極鍼”

東方鍼灸院院長

陰陽太極鍼研究会代表

吉川正子

“傷寒論鍼灸配穴選注”（単玉堂(著)1984 年中国人民衛生出版社、1996 年日本語訳）という書物が日本に紹介されて久しいが、傷寒論は日本では湯液の書として、最も重視されているバイブルの如き本であるが、実は湯液よりも鍼灸治療においてこそ重要な本なのである。鍼灸医学の陰陽論、五行論、十二経脈、奇経八脈、三陰三陽の六経弁証、病の伝変、病の所在、経脈の流注状況、その日その時に開く“開穴”の意味等を考える時、最も多くの事を学ばせてくれる巨著である。

私は中医学、東洋医学の基本理論である陰陽論は早くより、左右、上下、表裏の陰陽、時間の陰陽、寒熱の陰陽などの考え方を一つ一つ認識し、実践するようになり、とうとう左右上下表裏、その他の陰陽を取穴において、いつも考慮し、実践することにより、多大な効果に眼を見張る思いをし、経脈の不思議を常々強く意識してきた。そこで“陰陽太極鍼”という、陰陽のバランスを重視した治療を行うようになり、手技は鍼や王不留行の種子を“開穴”に貼るだけで、体表の一定部位の反応（圧痛、硬結、膨隆、陥下、発汗、寒熱など）の変化を確認して、症状の改善を得る治療を行っている。“開穴”とは症状により、関連経脈がその日、その時に開くツボであり、切経において特に過敏な所（気持ちが良いかくすぐったいなど）かを、患者さんに問い、大抵の場合、本人から答えが返ってくる所である。皮膚感覚が鈍い場合は圧痛、その他で考慮して選べばよい。そうすると多くの場合、初めの一穴で体表の反応（腹部募穴、腓腹筋、首周六合、背部愈穴等）が大きく変化するので仰天する。

頸椎の歪み（膀胱経）が反対側の足首の“太谿（腎経）”に鍼を置くだけで、即頸椎の異常が矯正され楽になる。置くだけで効く理由は、皮膚は中枢神経の脳と同じ外胚葉であり、発生生物学的に皮膚（細胞膜）の一部が陥没して、そこが脳になったと言われており、また皮膚の一番表層の角質層にあるケラチノサイト（角化細胞）に情報伝達物質の受容体がある為、表皮に与えた軽い刺激でも即遠隔に伝達され、局所が正しく処理されるのである。この事実は毎日のように治療室で繰り返されていることである。弾発指や腱鞘炎などの痛みや屈曲制限が反対側の足先で、陰陽のバランスをとれば即、楽になり、関節が滑らかに動かせるようになる。

このような、古典理論（陰陽五行、十二経脈、三陰三陽など）は長い歴史にたえて現代に伝わり、宇宙大自然の法則であり真実である。又、現代医学の生理学や解剖学と併せた、頸椎から腕・指先へ行く末梢神経のつながりと経絡の走行を考慮した治療は今だからできる。又、皮膚感覚を重視し、皮膚に接触するだけで、内部へ情報が伝わり、体内が処理される理由も、現代の皮膚生理学で説明出来るようになり、私たちは前代未聞の時代に生きている。

生命が宇宙に生まれ、今を生きる私たちは、無（気）より発生し、一個の細胞から分裂し、60兆個で人体となり、毎日代謝し生きて、次の世代へ引き継いでいく。この一瞬一瞬、祝福されて輝いて存在している。

今年は鍼灸医学（素問医学以前より実践されてきた宇宙を包括する自然医学）において革命的な年になると思っている。